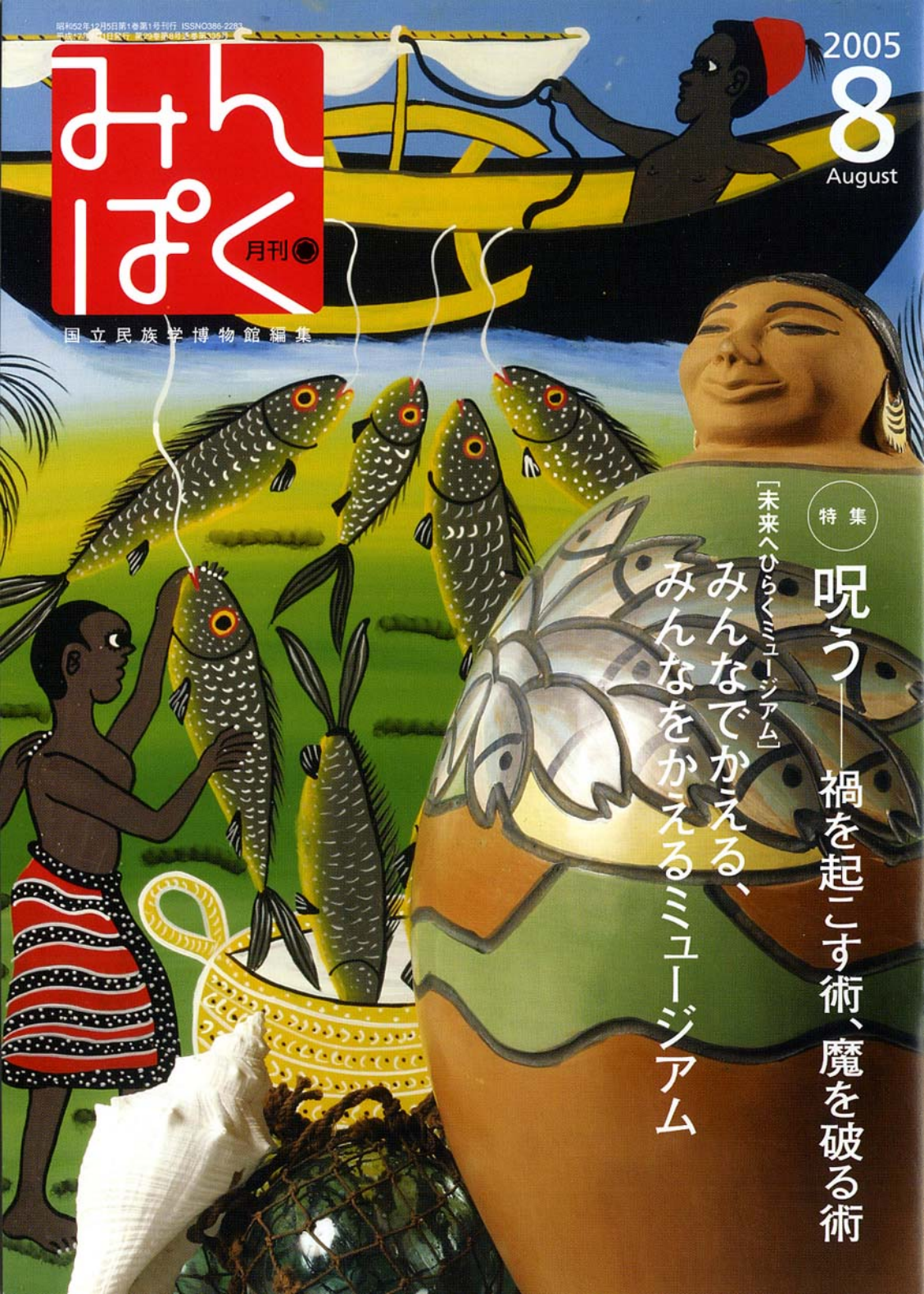


# みん ぽく

月刊

国立民族学博物館編集

2005  
8  
August



特集

## 呪う

禍を起す術、魔を破る術

「未来へひらくミュージアム」

みんなでかえる、  
みんなをかえるミュージアム

# 冒険の鍵は足元に

● 山村レイコ

最初の頃、楽々と走っている（ように見える）ヨーロッパ勢の中で、「根性」と「忍耐」の塊だった日本人参加者たちは、どこか異様な存在でした。きつと私も浮いていたに違いありません。今思えば、一〇カ国を二〇日間で移動するという状態は、言葉も文化も自然も激変する馴染みのない世界だったのでしよう。ところがヨーロッパ人にとつてのアフリカ諸国は、かつての統治国が多いためか、体力的にきつなくてもほとんど気分

はバカンス（に見えてしまう……）。その「違いの本質」を知るきっかけとなったのは、報道陣として四輪でラリーを追った時でした。ゴール前日、サン・ルイの町でいつものホテル・デ・ラ・ポストに泊まった主催者や報道人たちは、まさに前後夜祭ともいふべき大騒ぎを繰り広げていました。そこは飛行郵便屋さんたちや、一九三〇年にブラジルまで南大西洋横断を成し遂げたフランスの英雄ジャン・モルモーズ（サハラ砂漠での不時着はサン・テグジスリの小説の題材になったとか）の常宿で、天井には飛行機や航路がどんと描かれています。テイエリーがなぞったのは、まさにそのルート。初めてそれを知った時、リタイヤしても怪我をしても「それが人生さ」と言つて笑う選手たちのエスプリに触れたような気がしました。本当の強さ、孤独感、そして勇氣……。

ここ何年かの間に、世界も大きく変わりました。日本人も世界的な速さを持つようになり、優勝者も誕生。初めての参加者はうろたえるど

アフリカの砂漠をバイクや車で走るラリー競技に出てから、早一八年がたちます。今から三〇年ほど前、フランス人のテイエリー・ザビーネが「冒険の扉をあけよう」と呼びかけて始まったのが、有名なパリ・ダカールラリー。パリからセネガルのダカールまでの約一万キロを走破するのですが、すでにエジプトのラリー経験があつた私は、一九八九年に意気揚々と乗り込むもあつけなく惨敗。世界一過酷なラリーのゴールを踏むことができたのは、それから八年後でした。

ころか「侍スピリッツ」としてその精神力を称えられるまでになりました。壁はどんどん低くなり、一九九七年に私も初完走しますが、それは、住んでいる富士山麓とアフリカの自然は同じと思ひ、旅するいつもの心（競わず認めあひ、畏れには踊るような心で挑む）で大地を走った成果でした。冒険の鍵は足元に転がっていたような気がしてなりません。

## 目次

## CONTENTS

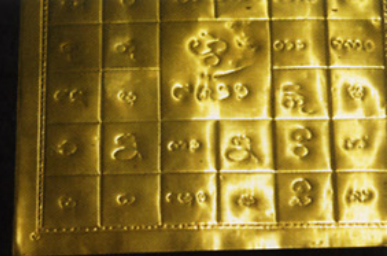
- 01 エッセイ 世界へ世界から  
冒険の鍵は足元に  
山村レイコ
- 02 特集 呪う  
——禍を起こす術、魔を破る術  
呪いの思考  
吉田憲司  
トウピラック  
——愛らしくも恐ろしい怪物  
スチュアート ヘンリ  
「必要悪」の呪い  
——イスラーム世界のスフィル  
清水芳見  
メルレと呪術師  
松山利夫  
ゴングの競演と黒魔術  
寺田吉孝  
ハワイの憑きもの落とし  
中牧弘允
- 08 未来へひらくミュージアム  
みんなでかえる、  
みんなをかえるミュージアム  
八木 剛
- 11 表紙モノ語り  
水族がかきたてる想像力  
野林厚志
- 12 みんなくインフォメーション  
友の会とミュージアム・ショップからのご案内
- 14 万国津々浦々  
三杯酒と安昭  
庄司博史
- 15 人生は決まり文句で  
バルチャ(八字)  
朝倉敏夫
- 16 手習い塾  
デーヴァナーガリー文字で  
名前を書く①  
町田和彦
- 18 地球を集める  
甘くて苦い、収集の思い出  
小長谷有紀
- 20 生きもの博物誌  
イモを見分ける  
菊澤律子
- 22 見ごろ・食べごろ人類学  
海を越える家事労働者  
石井正子
- 24 企画展開催中  
「みんなく水族館」

次号予告・編集後記



イラストレーション：栗岡奈美恵

やまむら れいこ / 女性ライダーの先駆者として、バイク、車、旅関係の著述、海外ラリー参戦、講演、テレビ・ラジオ出演など、幅広く活躍。富士山麓での暮らしをつつた近著「朝霧高原～風と暮らす」など、著書多数。http://www.fairytales.jp/



タイの呪符 (標本番号H0199377)



トルコの護符 (標本番号H0144219)

### 特集

# 呪

## 禍を起す術、魔を破る術

怨敵を陥れるための呪い、また、悪魔や怨霊などの祟りを祓うためのまじないなど、人間が利益を得たり、身を護るために霊的なパワーを操作するという営みは、風土や信仰の異なるさまざまな土地に存在する。日本にも破魔矢を飾るなどの風習が身近なところにある。しかし、素人が下手に呪術の真似事をするのは禁物。霊の力を操る「その道のプロ」の不可思議な技が頼られる。



呪いの人形 (愛知県 標本番号H0036686)



タジクのお守り入れ (標本番号H12450)



エジプトの邪視除けのお守り (標本番号H0168553)



モロッコのお守り入れ容器 (標本番号H169295-1)

# 呪いの思考

本誌で「呪う」という特集を組むという。今、なぜ「呪い」なのだろっか。確かに、陰陽師・安倍晴明をめぐる小

吉田 憲司 (ただけんじ)  
文化資源研究センター

説や映画がヒットし、インターネット上には「呪い」をめぐるページが、大量に出現している。その一方で、「呪い」な

ど、歴史上の過去の出来事、あるいは別世界の出来事と考える読者も多いはずだ。「呪い」とは、特別な力をもつとされる言葉や「薬」を用いて、他人に危害を加えようとする行為をいう。呪術あるいは魔術ともいう)と同一視されがちであるが、呪術には、他者に危害を

加えようとするものと、自己や他者の利福を追求しようとするものの、二つの側面が認められる。通常、「呪い」は前者の意味で用いられることが多い。その区別を明確化するため、前者の攻撃的な目的をもつものを黒呪術もしくは邪術、後者の防御的な要素の強いものを白呪術とよぶこともある。それにあわ

せて、その術の行使者を、それぞれ邪術師と呪術師(もしくは呪医)と区別するむきもある。ただ、立場や状況に応じて、この両者の区別はしばしば不明なものとならざるをえない。そのため、逆に、呪術から人間関係や社会関係が浮かび上がってくる。人類学が久しく呪術に関心を注いできた理由はそこに

そうではない。邪術師が人間の能力を超えるさまざまな能力をもつとされることに込められているメッセージは、まさに、邪術師は人に非ずということであり、言い換えれば、チエワの人間には、そのような人間はいないということにほかならない。だからこそ、重大な不幸の原因と告発され、「呪い」の行使を認めさせられた人物は、チエワの領域から追放されてしまうことになる。

浮気を防止するという正当な目的をもつ以上、その妻に自分が「呪い」を行使するという意識はない。しかし、知らぬ間にその「薬」を使われた夫の側からすれば、それは明らかに「呪い」の行使と受け取られることになる。その点からみれば、チエワの社会には、明らかに「呪い」の行使とそれに用いる「呪い」の「薬」は存在している。

をした使い魔というの、アニメのポケモンたちのイメージと奇妙にも重なり合う。私たちのあいだでは、不幸の原因を誰かの「呪い」のせいだと思えることはあまりない。しかし、近親者や身の回りに不幸が続くと、私たちがまた、何か特別な力がそこに働いているのかも知れないと疑いはさみはじめるのではないだろうか。あるいは、その理由を風水に求め、またある者は死者や祖先に求める。「呪い」もまた、そうした、説明のつかない出来事に対する当座の説明、あるいは「レッテル張り」の行為のひとつにほかならない。私たちの思考と「呪い」が日常的に話題になる社会の人びとの思考とは、それほど隔たったものではないようだ。

地球上には、呪術が日常的に話題になる社会も少なくはない。私が過去二五年間にわたって通い続けてきたアフリカ、ザンビア共和国のチエワの人びとの社会も、そうした社会のひとつである。人間の死など、重大な不幸が発生すると、チエワの人びとは、それが誰かの「呪い」のせいではないかとまず考え、その原因を特定するために霊媒や呪医のもとへ通う。常習的な「呪い」の行使者、すなわち邪術師には、さまざまな神秘的なイメージが付与されている。邪術師は、自分が呪い殺した人物の死肉を食う。邪術師は、自ら動物に変身するほか、他人に危害を加える、などといったものである。西洋の魔術師は、ホウキに乗って飛ぶが、チエワの邪術師は、自ら飛行機やヘリコプターをつくりだすものもあるとされる。

とはいえ、チエワの社会に「呪い」の行使が存在しないかといえば、決してそうではない。筆者が、薬草医に師事して、「薬」の知識を教わっていた時期、夫の浮気を阻止する「薬」を求めるとき、夫の女性へ、その薬草医が「薬」を処方する場に居合わせたことがある。夫の

浮気を防止するといふ正当な目的をもつ以上、その妻に自分が「呪い」を行使するという意識はない。しかし、知らぬ間にその「薬」を使われた夫の側からすれば、それは明らかに「呪い」の行使と受け取られることになる。その点からみれば、チエワの社会には、明らかに「呪い」の行使とそれに用いる「呪い」の「薬」は存在している。

「こうしたことを書き連ねると、あたかもチエワの人びとのあいだに、人を呪うような人物が多数いるかのように受けとめられるかもしれない。が、じつは



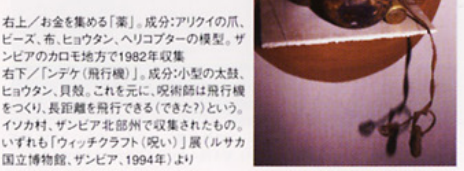
スィオン聖堂教会の霊媒による治療の様子。ニヤマメ村、ザンビア、1986年



チエワの社会では、とくに大干ばつや経済混乱のおこった1990年以降、多くの人びとがキリスト教に入信した。写真は、スィオン聖堂教会の洗礼の様子。人びとにとって、呪いの恐怖からの解放が、入信の大きな動機のひとつとなっている。ムロロ村、ザンビア、1994年



呪いから身を守るため、呪術師が嫌うとされる植物から採った「薬」を、自宅の床に埋める。カリザ村、ザンビア、1993年



右上/お金を集める「薬」。成分:アクリイの爪、ビーズ、布、ヒョウタン、ヘリコプターの模型。ザンビアのカロモ地方で1982年収集  
右下/「ンデケ(飛行機)」。成分:小型の太鼓、ヒョウタン、貝殻。これを元に、呪術師は飛行機をつくり、長距離を飛行できる(できた?)という。インカ村、ザンビア北部州で収集されたもの。いずれも「ウィッチクラフト(呪い)」展(ルサカ国立博物館、ザンビア、1994年)より

# 「必要悪」の呪い —イスラーム世界のスィフル

清水 芳見

(しみず よしみ)  
中央大学教授



トルコのスプーン形護符  
(標本番号H0144051)

トルコの呪術用スタンプ (標本番号H144015)

イスラームの聖典クルアーン(コーラン)には、不信仰者に対するアッラーの呪い「ラウナ」についての言及があちこちに見られる(たとえば第二章八九節)。ムスリム民衆のあいだでは、こうしたアッラーの呪いのほかに、人間が人間に呪いをかける行為「スィフル」が古くから知られていた。このことは、クルアーンの第一三章四節に、ひもに結び目をつくり、それに息を吹きかけることで誰かに呪いをかけようとする老婆の存在が記されているところからもわかる。

クルアーンの記述(第二章一〇二節)にも示されているように、イスラームでは、災いをもたらすことを目的として人に呪いをかけることは、好ましくないこととされており、ハディース(預言者ムハンマドの言行に関する伝承)のなかでも、ムハンマドによって非難されている。

クルアーン(第二章一〇二節)にも示されているように、イスラームでは、災いをもたらすことを目的として人に呪いをかけることは、好ましくないこととされており、ハディース(預言者ムハンマドの言行に関する伝承)のなかでも、ムハンマドによって非難されている。



まじない鉢。クルアーンの意味がアラビア文字で書かれている(12~14世紀、エジプト・シリア、個人蔵)

ラビア語のスィフルに由来する言葉であることはいうまでもない。これをかけられたために、歩くことができなくなったとか、病気になるなどという話が、調査地の村でも聞かれた。

クルアーンでもブルネイでも、呪いに対しては、対抗のための呪術がおこなわれる。イスラームでは、こうした災いを取り除くための、どちらかというといえ、思われる呪術も禁じられているのだが、ムスリム民衆のなかで、そのことを知っている人は少ない。ただ、知っている人も、その多くは、「必要悪」とでもみなしているのか、黙認しているようだ。

# トウピラック

愛らしくも恐ろしい怪物

スチュアート ヘンリ

放送大学教授



アザラシを表現するひれ足と、人間を表現する五本指の手とフーズを履いた足のトウピラック  
(標本番号H025359)

グリーンランドへ旅すると、イスイト・アイト店や飛行場のお土産店で必ず見かけるのが、トウピラックの彫刻である。その愛らしくもグロテスクな姿が観光客やコレクターの心をとらえ、イスイト・アイトのモチーフのひとつとして世界的に有名になっている。しかし、トウピラックはそもそも誰かを殺すための呪物であったことは意外と知られていない。

グリーンランドへ旅すると、イスイト・アイト店や飛行場のお土産店で必ず見かけるのが、トウピラックの彫刻である。その愛らしくもグロテスクな姿が観光客やコレクターの心をとらえ、イスイト・アイトのモチーフのひとつとして世界的に有名になっている。しかし、トウピラックはそもそも誰かを殺すための呪物であったことは意外と知られていない。



アザラシとベニス(グリーンランド・ヌーク博物館蔵)。制作依頼者のベニスを吸って生命を搾けたトウピラックが呪いの対象の人を探らして殺すのだった



もじゃもじゃのトウピラック(グリーンランド・ヌーク博物館蔵)。キツネの胴体に人間の頭をつけたトウピラックは、自由自在に海に潜ったり、空を飛んだりすることができたとされる

# メルレと呪術師

松山 利夫 (まつやまとしお)

民族文化研究所

森のむらでのことだった。皆が寝静まった夜更け、異様な物音に目覚めた。落ち葉を踏み、枯れ枝を踏み折るよう何かが動いている。それはまるで入り込む隙間を探すかのように、ほくろの小さなデントをまわっている。わずかなあいだだったはずなのに、手がじつとりと汗ばんだ。

朝を待ちかねて、長老にそのことを話した。「それはメルレだよ。以前、このむらで大きな葬式をした。その男の影の魂が現れたのだろう。」

聞かないほうがよかった。その夜は耳をそばたてるばかりで、少しも眠れなかった。

そんなことがあった数日後、四〇歳代なかばになった長老の息子が、トラックに乗ってまちからやってきた。紅茶を飲みながらしばらくくつろぐと、夕方になって隣りむらへ病人の見舞いに行くという。誘われるまま気軽にトラックに乗り込んだ。

陽が落ちかけたむらは、重苦しい空気がつまれていく。いつもは陽気に声をかけてくれる若者も、押し黙ったままである。そのうき夜は月がない。いやな感じ。病人は女性だった。長老の息子はうぶせになった婦人のかたわらにたき火を用意させ、それに手をかざしている。しばらくすると、彼は婦人の胸をさすり背中を手で押し、口を付けて強く吸う。突然、婦人は何かを吐き出すような、人のものとは思えない奇妙な音を吐いた。

「これで心配ない。メルレは出た。」

そういういかにも疲れたといったふうで、かたわらに座り込んだ。友達は呪術師だったのだ。

死者の影の魂メルレはフクロウとともに森に住み、夜になると動きまわる。それはときに親族を訪ね、原因不明の病気をもらす。生前に恨みを抱いていた人が襲われると、外傷ひとつなく殺されてしまう、ともいう。そんなメルレの姿を見ることができ、その力に対抗できるのは呪術師だけらしい。でもあの夜、メルレはなぜ外国人のほくを襲おうとしたのだろう。

これを体験

したのは、オーストラリア北部アーネムランドに暮らすアボリジナル、ジナンの人びとを訪ねたときのことである。

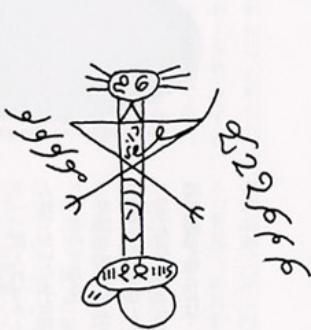


友達の呪術師(左)、葬送の儀式をおえた婦人の道で。スポンにTシャツがふだんの服装



高床式の樹皮家屋。ぼくがメルレに襲われたときのむらびとの家。いまではほとんどみられなくなった

呪う 禍を起す術、魔を破る術



アギマツ。黒魔術から身を守るまじないの図柄

# ゴングの競演と黒魔術

寺田 吉孝 (てらだよしあき)

民族文化研究所

フィリピンのイスラム教徒の結婚式では、クリンタンというゴング音楽が演奏される。演奏には誰でも参加できるため、腕に自信がある者は、結婚式があるむらに乗り込んで技を競う。私にこの音楽を教えてくれたタンゴングさんは、ガンティンガンという楽器(四つ一組のつりゴング)の名手である。目にも留まらぬ撥さばきは、いつ見てもスリリングだ。

ある日、彼は伴奏者を従えて腕試しに行行った。ところが、演奏が佳境に入ろうとしたとき、パタッと撥を落としてしまったのだ。手にまったく力が入らない。こんなことは初めてだ。伴奏をしていた太鼓奏者が騒ぎ出した。きつと黒魔術(バンガリタオ)のせいと違いないと、両チームが掴み合いのけんかになったが幸い怪我人はなかった。演奏家がボディーガードを引き連れているのは、このいう時のためである。

相手の演奏を邪魔するには、つものやり方があるという。ひとつは、アラビア語で書かれた秘密の文言を小さな紙に書き、これを撥に仕込んでおく。自分の演奏が終わったら、さりげなく撥を楽器のもとにおいて去り、相手はその撥に触れば、手や腕が引き攣り演奏できなくなる。もうひとつの方法は、黒魔術師だけがもっている書物の一説を暗記し、相手に吹きかけるように唱える。一目置かれる演奏家たちは、家を出る前にクルアンの節を唱えたり、まじないの文様(アギマツ)を描いた紙切れを身につけたりして黒魔術から身を守ろうとする。一〇年ほど前に見た音楽コンテストでは、参加者に黒魔術を使わないようによびかけた長老の姿が印象的だった。音楽家同士の嫉妬は深く、激しいのだ。

私はといえば、この音楽を習い始めて、五年たつが、いまだに黒魔術の心配をするなどという貧乏な悩みをもちたためしがない。



カンティンガンの演奏  
図・写真提供: Danongan S. Kalanduyan氏



ハワイの東大寺希咄別格本山でおこなわれる「憑きもの落とし」

# ハワイの憑きもの落とし

中牧 弘允 (なかつひろゆき)

民族文化研究所

ハワイに日系人女性の建立した立派な寺院がある。東大寺希咄別格本山と称し、奈良の東大寺で修行した尼僧、故平井辰昇による宗教的救済活動で戦後二世を風靡した。平井は不動信仰を中核に、地蔵や観音、阿弥陀如来、薬師如来、さらには

弘法大師や父母の郷里熊本の神仏をまつり、護摩、加持祈禱、流行、断食など「お清度」とよぶ多彩な宗教活動をくりひろげていた。

そのひとに憑きもの落としがあり、死霊、生霊、動物霊を毎週月曜日の晩に落とし、まず霊に憑かれた人をつつ伏せに寝かせて、背中にバスタオルを当て、補助役の信者が布の袋にくるんだ百万遍法要の数珠をもち、それで身体を叩いた。そのとき平井は頭や肩を押ささげながら、口きたなくのした。

「さあさあ戻れ戻れ戻れ、こん畜生、しゃんしゃ戻れしゃんしゃ戻れ、こん畜生、根性はかりまわしやがて。」

そこに死霊や生霊の実名がはいることもあった。補佐役もそれに相し「戻れ戻れしゃんしゃ戻れ」と唱えた。悪態をつかないと落ちないと信じられているからである。生霊には夫や妻、あるいは信者仲間がいた。動物霊の場合、狐が悪くとキャンキャン鳴き、大神は舌を出して四つん這いになり、蛇は跳んだりくねったりしてドアから出ていったという。

平井はまた霊に憑かれた者を正座させ、みずからは直立し、左手を腰に当て、大声で「臨兵闘者皆陣列在前」と唱え、右手で縦、横に九字を切った。九字は陰陽師や修験者がよくもちいた呪文で、災厄をはらい、敵に勝利を得るための護身法である。



東大寺希咄別格本山

# みんなでかえる、 みんなをかえるミュージアム

八木 剛 (やぎつよし)

兵庫県立人と自然の博物館主任研究員



兵庫県立人と自然の博物館外観。平成4年10月開館。三田市のニュータウンにある。大阪、神戸の中心部から約1時間

いつまでも、来ると思うな、お客さん。今どき、がんばって集客しようと思わない方がいい。関心の深い人はごくわずかで、その他大勢は、もっとほかに行くところがある。来ないなら、出かけてゆこう、博物館。いないなら、つくってみせよう、お客さん。待つものでなく、つくるもの。これからのキーワードは、リプロダクションである。

私の経験から、昆虫少年は、多めに見積もっても一〇〇〇人に一人くらい、各学校に一人いるかないないかの密度である。かつては学校に生物クラブが多く存在し、準昆虫少年もあわせて収容していた。現在、生物系に限らず、文科系のクラブ活動は、音楽、演劇などの一部を除き、壊滅的狀態だ。一〇〇〇人に一人では、学校単位のクラブ活動は成立しえない。彼らは学校では話のわかる指導者や友人に恵まれず、二つの顔を使い分けるか、沈黙するほかないのである。そんな彼らに私は声をかける。「安心しろ。ここに来ればキミはワッパだ。」

中学生は三年経つと高校生になる。五年もやっていると、高校生の数も増えてきた。そこで、今年度からは、「ひとほく」連携活動グループ(注1)の制度により、彼らは「テネラル」(注2)という名称のグループをつくって、活動を継続している。私が彼らに期待している役割は二つある。ひとつは、小学生対象の標本づくり教室などへの協力である。昆虫の標本づくりを、四人に一人の指導者が必要である。増加の一途をたどる「ひとほく」のキヤラバン事業や外部からの依頼事業において、彼らの存在は不可欠のものとなりつつある。もうひとつは、その



真剣な表情で、樹皮下に隠れている昆虫を採集している



合宿のメインイベント、灯火採集。発電機を回してブラックライトを点灯し、灯りに集まるさまざまな昆虫を採集する

ような事業のアシストを通して、有望な小学生をユース昆虫研究室にスカウトすることである。「自分がガキのころを思い出して大事にしろ。スジのいいのはチェックしておくこと」と言っている。ちょっとくやしだが、小学生の記憶には、博物館の研究員よりも「一緒に虫とりをした高校生のお兄ちゃん」の方が強く印象に残るらしい。高校生は小学生の指導を通じて自身自身の成長を実感するし、小学生は身近な先輩の後ろ姿に憧れる。そうやって、昆虫少年のリプロダクションは回転し始めるのである。

博物館の大きな役割は、特定の分野に強い関心をもつ者の興味を受け止め、才能を伸ばすことである。一〇〇〇人に一人が生きて活動し、社会還元をおこなうとすれば、他の九九九人に大きな利益となるだろう。それゆえ博物館は存在し、そう信じて日々邁進するのである。博物館は、この「事実」をもっと強くPRすべきであると思う。

小学生は偉大な心の一人と出会うこともできず、ただのひとりよがりになる。したがって、一〇〇〇人に一人をターゲットにするためには、一〇〇〇人すべてをターゲットとしなければならない、ということになる。

狙いは、小学校と家族である。小学生を擁する家族は、リタイヤ世代と並んで、最も活動的である。学校はある一定の地域に居住する同年代の児童生徒がほぼすべて含まれるため、取りこぼしがない。特に、昨今の「総合的な学習の時間」は、博物館が入り込むきっかけとして大いに活用したい。

「総合的な学習」では、小学生がイ

一〇〇〇人に一人をスカウトする  
兵庫県立人と自然の博物館「ひとほく」が主催する「ユース昆虫研究室」は、昆虫を愛してやまない中学生のためのセミナーで、今年で五年目になる。年間二日間開催、受講料八〇〇〇円。今年度からは私立学校の生徒も参加しやすいよう、日曜開催とし、中間・期末考査の日程を考慮したスケジュールを組み、一泊二日の合宿を二回と三泊四日の強化合宿を取り入れた。東は大阪府池田市、西は兵庫県姫路市に至る広範囲の中学生が、一五名ほど毎月集まり、昆虫採集に興じ、昆虫談義に花を咲かせている。もつとも、遊んでばかりいるわけではなく、会場を提供いただいている施設には調査報告書を提出し、ポスター

や標本展示も制作してもらおう。昆虫少年は、減少しているといわれている。しかし、私の見たところ、虫好きの少年は常に一定の割合で存在している。おおむね小学校四年生までは、過半数の児童(男子は七割方)が虫好きである。五年生になると児童は少年の気配を帯びるようになり、お稽古事や中学受験のプレッシャーも加わって、虫好きの割合は半減する。そして、中学生になると、虫好きは踪影もなく消滅してしまう。アミとカゴは子どもの象徴でもあって、長ズボンを履くとともに、弾り去れるのが習いだからである。しかし、中学生になってもアミを捨てることができず、昆虫道を追求する少年が稀に存在する。これがいわゆる昆虫少年である。



アメリカマストドン。常設展示は、動植物および化石の標本類のほか、環境問題に関する展示がある

未来へひらく  
ミュージアム

このトンボは、同定が容易であること、日中に活動し出現期が長いことなど、学校で扱う学習素材として適している。

ミヤマアカネという「タレント」を売り出すにあたり、私は、少し大きすぎたが「日本でいちばん美しい赤とんぼ」というキャッチコピーをつけ、新聞紙上で情報を募集したのち、「夏期教職員セミナー」で説明し、宝塚市内の小学校で「総合的な学習の時間」の素材として取り上げてもらった。昨年度は二校、今年度は三校がミヤマアカネ学習に取り組んでいる。彼女らには、「キミたちも研究員となつて、私と共同研究していただきませう」と鼓舞した。子どもたちは、ひんばんに校区に出て、それまで存在に気づかなかったトンボが身近にいることを発見し、手にとり、毎日のように観察し、仮説をつくり、論文を書いた。地図を読めるようになったし、エクセルの表計算や、パワーポイントでのプレゼンテーションまで学習した。

彼ら彼女らは自宅で体験を話す。その結果、兄弟姉妹や保護者も関心をもつたろう。せつかく関心をもった相手を放置しておくのはもったいない。そこで、学校教育から一歩外へ出てみんなミヤマアカネを楽しもうという「みやまあかね祭」を企画した。

はやりありきたりとなった博物館に多くの人が詰めかけるはずはなく、専門家の講演会も、大学が力を入れる生涯学習事業で事足りてくる。学術標本資料の整理保管という博物館の第一の役割も、置かれている状況は同じである。モノの貴重性を理解する人は、放つておいて現れるものではない。ましてや学問が細分化された現代ではなおさらである。東京ディズニーランドの一人勝ちのように、莫大な予算を動かすことが認められる一部の巨大館でなければ、昔ながらのビジネスモデルは成立しないだろう。

ミュージアムの長所は、いろんな人との関係を自在にプロデュースでき、自身のあり方も比較的自由であることである。目玉商品も予算も乏しい「ひとほく」のような地方博物館は、原点に帰って、いい素材を発掘し、それをひびきかけて地道に仲間づくりをしてゆくしかない。裏を返せば、サービスを拡大再生産するような構造をあらかじめ内包しておかないと、いずれこれもが見向きもしくなくなるということになる。私が年間一〇〇〇人にサービス提供すると、一〇年やれば一万人だ。しかし、一緒にサービス提供する仲間が増え、それによつてサービス提供力が年間二倍になるとすれば、一〇年間で一〇〇万人を超え

関心をもった児童の保護者が名乗りを上げてくださり、「みやまあかね委員会」という名の「ひとほく」連携活動グループとして、イベントの企画運営にあたつている。夏休みの終わりにころには、このはじめての企画が実現しているものと思つた。関東地方に転校した児童も、この日には家族で帰つて来るらしい。仲間内では「何年か続けて、同窓会のような場になつたいいね」と言っている。子どもたちの輝く目は、兄弟姉妹や保護者を引きずり出すパワーをもっているのである。

ミヤマアカネの存在は、「総合的な学習の時間」で取り組んだ児童が二年間で五〇〇人だから、そこに保護者や兄弟姉妹を加えると、すでに二〇〇〇人くらいに認知されているだろう。「みやまあかね委員会」には、年々新たなメンバーが加わるはずである。学校から保護者を経て地域へ、関心者のリプロダクションが動き始めている。

### 人をよぶのは人

世のなかになぜすらしものがないなつた。海外旅行は手軽になり、インターネットには情報満載、かつて昆虫少年が空想に耽つた外国の巨大カブトムシもペットショップで売っている。も

る相手にサービス提供できることなる。実際にはこのような数字はありえないが、原理が単純だとすると、利息と同じで、仲間づくりを少し心がけるかどうかで、年月が経てば経つほどその差は拡大し、気づいたときには大富豪になつているか、取り返しのつかないことになつているかのどちらかである。

大富豪になるためには、当事者がリプロダクションの必要性を意識しさえすればよい。仲間づくりの過程において、多くの利用者の声が、博物館の事業内容に「く自然にフィードバックされてくるだろう。そうならば、市民が館に要望書を提出したり、館が半ば内部対策的に「利用者の声をきかせてください」とアンケート調査をする必要もなくなり、ほんとうの意味でのみんなのための博物館が実現するように思う。傲慢、妄言かもしれないが、ときには原点に戻つてみることも必要だと思つた。

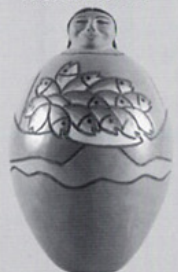
### 注1「ひとほく」連携活動グループ

「ひとほく」と連携してさまざまな市民サービスを実施するグループ。セミナーの終了後、グループとなり、現在九団体を登録。研究員がアドバイザーとなり、責任をもつグループをコーディネートする。注2 テナント (tenant) (成金になること) 直後の表紙の強化を十分な状態のこと。高校生が自らの状態をたどることを命名したのも。

## 表紙モノ語り 水族がかきたてる想像力

企画展「みんぱく水族館」出展作品/チルカナスの焼きもの(高さ45.6cm、直径28.6cm)、ティンガティンガ絵画(縦61cm、横59cm)、ほか2点

野林 厚志  
文化資源研究センター



食物連鎖の頂点に立つ人間にとつて、魚や貝、エビ、カといった水族は、自然が与えてくれる恵みとして世界中のいたるところで食されてきた。いっぽうで、それぞれの土地の人のびとは、自分たちの利用している水族が、どんな色や形をし、どのような能力をもち、どのように活動しているかなどを十分に熟知してきた。人びとは水族を、衣・食・住のなかでただ利用するだけでなく、時には畏敬の念をもつて、折りや



つくれた土器である。チルカナスの焼きものは、今から三〇年ほど前に現地の若い職人が、インカ時代あるいはそれ以前の焼きものの技術を再現したものである。表紙の背景になつている絵画は、タンザニアのティンガティンガ絵画とよばれるものである。ティンガティンガ絵画は一九六〇年代に、タンザニア南部のトゥンドール地方出身の若者が描いていた動物や植物をモチーフにした

祭りの対象としてきた。このようにして精神でも人びとを支えてきた水族とのつきあいの様子は、しばしば絵画や造形物のモチーフに使われる。古くは日本の縄文土器に、鱈の頭をつつこんだサケと思われ魚の姿が描かれている。また、新しく生まれてきた芸術のなかにも水族と人間とのつきあいが大切なモチーフとなつていることも少なくない。

表紙右側にあるものは、ペルー北部のチルカナスという場所で作られた土器である。ペルー北部のチルカナスという場所で作られた土器である。ペルー北部のチルカナスという場所で作られた土器である。ペルー北部のチルカナスという場所で作られた土器である。



昆虫を採集するトラップのしかけかたの指導。高校生のお兄ちゃんがクワを使って穴を掘ってくれている



昆虫の標本をつくる小学生。昆虫は乾燥状態の標本とする。昆虫の体はこれくらいきれいな標本をつくるには、かなりの訓練を要する



宝塚市立仁川小学校の実習。研究員が学校を訪問し、講義や実習をおこなうこともしばしばだ



ミヤマアカネ。オスは全身が鮮やかに赤く色づき、美しい。翅に褐色のストライプが入っているのが特徴

未来へひろく  
ミュージアム

# 三杯酒と安昭

庄司博史(しよしひろし) 民族社会研究部

## 中国青海省「その1」

**そ**の土族の村で突然の大歓迎をうけたのは一九九二年夏のことだった。前日の夕方、聞き取り調査から県政府の招待所にもとると、その前日、町の公園で会った青年が。何度か足をほこび、村中で歓迎の用意をして待っているとつげに来てくれた。中国のほぼ中央、青海省の省都から四〇キロたらずの互助土族自治県で言語保持の調査をはじめた二年目であった。民族委員会や県政府



両手をそろえて振りながら安昭を踊る



三杯酒を飲む筆者。酒の回りにかけているのがカタ

撮影:栗永章

の役人ともいづくか村々をまわっていたが、質問にこたえる村人たちが同席する役人に気がねしているのをいつも感じていた。そこで機会をみて、町で会った青年にかれの村へ行ってみたいともちかけたのだ。青年は徒歩で三分ほどのA村から来ていて、祖父にきいてみると返事だ。たいしてあてにではないかと思った。思いがけず招待されたことにおどろいた。翌朝はやく調査助手の秦氏と村にむかった。道路から村までのあぜ道のなかほどに、民族衣装で着飾った若者が数人待っている。娘が差し出したのは、カタ(歓迎の布)と小皿

のつた三つの盃。六〇度はある白酒を盃三杯飲みほさねば、事の進行がストップするという土族名物の三杯酒である。村の入り口には青年の祖父という老人が村人とともに待っていた。客人をむかえる歌をうたいながら三杯酒をさし出す。

それからが大変であった。同じことが門前、戸口、客間でくりかえされる。それはかりではない。家族や村びとも入れ替わり立ち替わりおとすれ、日本人というめずらしい人間に歌と酒をふるまってくれる。まさに酒攻めで、このときは酒が飲めてよかったと思つたことはない。その間も屋内はおろか庭や屏のむこうからも人びとの視

線がそそぐ。やがて食事と酒が一段落した。老人に手を引かれ外へ出る。広場では村人が輪になり歌をうたいながら踊る安昭が始まっていた。婚礼や正月など祝事にはかせない踊りである。盆踊りのような踊りの輪にひきまかれ気がつく。と四〇〇人の村民に取り囲まれていた。老人はどうやら長老らしい。土気した顔で盛んに村民に指示をする。さそわれるまま家々をほこしてまわる。もちろん酒つきである。突如若者が公園へ行こうという。花見を開かせたらしい。青海で盛んな歌垣の歌である。情歌や恋歌などを独唱やかけあいで歌うが、決して村内や親のまえでは歌えないという。声自慢の青年が歌いはじめ、やがて公園中あちこちでかけ歌が聞こえ始める。

陽の落ちかけた村では、安昭の途中で酔いつぶれた老人がいつしか目を覚まし待ちわびていた。仕事からもつた共産党の幹部も加わり、若者が酒を買いに走らされる。

夜更け、翌日の出発をひかえ、泊まつていけという誘いとわり、後ろ髪を引かれる思いで席をたたった。まづくらの夜酒、村人が町までおくる。何十杯の白酒をかきかき記憶にはなかつたが、頭のてっぺんまでアルコール一杯だったことは確かだった。当初の目的の調査には程遠い結果になったが、中国でははじめて、打算のない心からの歓迎をうけたことがうれしく、すがすがしい気持ちで満ちていた。

しかし、この村についての話はここで終わらない。数年後おとすれたこの村では、もともたしをおどろかすことが待っていたのである。

# パルチャ(八字)

朝倉敏夫(あさくらとしお) 民族社会研究部

**世**は「韓流」ブームということに韓国ドラマの男優に熱中するおほさまたち

の姿は、日本のひとつの社会現象として、さまざまに解説されているが、その相手役の女性の生き方に自分自身を投影させているのだろうか。

韓国ドラマに登場する女性は、そのほとんどが苦難にあうと、それは自分のパルチャのせいだ



「宮廷女官チャングムの誓い」の1シーン

©2003-2004 MBC



街なかの雑居ビルに記のマーク。ボサル(善哉)と称する古い路がいて、四柱のほかに宮合(結婚の相性)、六爻(吉凶占い)、新占(家や墓の占い)などをみる 撮影:川上新二

という。パルチャは、古いひとつ、四柱推命からきている。生まれた年・月・日・時の四本の柱のもとに運命を占う。この時、年・月・日・時のそれぞれを、漢字二文字の干支で表したところから、漢字では「八字」と書く。

「パルチャがいい」といえば、ふうには生まれついで運勢がよいことを意味する。したがって、これは男性にも使われるのだが、すばらしい人生を手に入れるというよりは、もともと身近な生活への幸福について、とくに女性についていうことが多い。

たとえば、結婚生活がうまくいかないとか、夫に早く死なれたとか、その女性の周りで不幸なことが起ると、「パルチャが強い女だね」といわれる。いかに優しくほがらかな人でも、「パルチャが強い」のは性格とは関係がないから、直すことはできない。だから「パルチャが強い」といわ

れるのは、女性にはいっばい嫌なことである(呉善花「濃縮パック コリアンカルチャー」三交社、二〇〇三年)。

しかし、韓国の女性は、たとえパルチャが悪くても、これを単に受け入れるということはないように思われる。苦難をうける人生であれば、それをあきらめるのではなく、きりかえてゆこうというたくましさがある。韓国パルチャ(おほあさん)たちは、さまざま苦勞をふりかえり、「私の人生は小説になるよ」といって「身世打命」(身の上話を闊達に語ってくれる)。

私たちが韓国ドラマに魅せられるのは、日本人の生き方が軟弱になつたといわれるなかで、こうしたたくましさ、ポジティブな生き方を求めているからかもしれない。

かくいう私も昨年一〇月からNHK・BS2で放送している「宮廷女官チャングムの誓い」の日本版監修をしながら、この韓国ドラマにはまろてきている。一六世紀初頭、激動の時代、陰謀渦巻く朝鮮王朝の宮廷を舞台に、ひたむきに生きた女性、チャングムの物語である。(見のがした方は、ガイドブックがNHK出版から出ています)

「韓国人の心」(学生社、一九八二年)のなかで李御察は、韓国文化を読み解くキーワードのひとつ「恨」を「自分の内部に沈殿し積もる情の固まり」という。そして「恨の文化とは、磨げられ、踏みにじられながらも、美しく、穏やかな、あの望ましい世界に絶対を実現される証のなかつた心の世界」をめざしていく文化なのだ」と述べている。この「恨」も、「パルチャ」のとらえ方と相通じるものがあるように思える。



# デーヴァナーガリー文字で 名前を書く①

町田 和彦 (まだなかひこ)  
東京外国語大学  
アジア・アフリカ言語文化研究所教授

アジアは文字の宝庫である。ラテン文字(ローマ字)はもろろんのこと、世界にあるほとんどの文字がアジアで使われている。一方、アジアほど多くの文字を生み出した地域も地球上類をみない。おもなものだけでも漢字、かな文字、ハングル、インド系文字、アラビア文字などがあり、文字の形も仕組みもさまざまである。今回は、アジアで生まれた文字の中でもっとも多くの子孫に恵まれたインド系文字について紹介しよう。

日本ではあまりなじみのないインド系文字だが、漢字文化圏とほぼ同じ規模の約一四億の人びとがこの文字文化圏で生活をしている。インド系文字には多くの種類があり、東南アジアのタイ文字、ビルマ文字、クメール文字、ラオ文字などや、南アジアのデーヴァナーガリー文字、ベンガル文字、グルムキー文字、タミル文字、テルグ文字、シンハラ文字、チベット文字など、バラエティに富んでいる。見た目でどれも違ってみえるこれらの文字はすべて、古代インドで完成したブラーフミー文字に起源をさかかせることができた。そのため、これら同じ系統に属する文字を総称してインド系文字とよんでいる。

ここではインド系文字すべてを紹介することはとらいていけないので、インドで使われているデーヴァナーガリー文字を中心に説明しよう。デーヴァナーガリー文字は、ヒンディー語、マラーティー語、ネパール語などの現代語のほか、サンスクリットやパーリ語などの古典語を表記するためによく使われる。現在さまざまな形をしているインド系文字だが、その基本的な仕組みや原理は、紀元前三世紀に登場した元祖ブラーフミー文字以来今日までかわっていない。そのため、デーヴァナーガリー文字の書き方・読み方を身につければ他のインド系文字にもすぐ応用できる。

デーヴァナーガリー文字は、単独の子音字は子音のみをあらわすのではなく、短い母音「あ」(デーヴァナーガリー文字の場合)を含んでいるのだが、ここではとりあえず子音をあらわすものとして理解しておこう。また、「か、き、く」も実際には「か、き、く、け、けい」に近い音をあらわす。

表②は、現代日本語のかな文字の発音にはほぼ対応している。

応ずるデーヴァナーガリー文字を配置したものである。便宜的に、濁音、が行、ざ行、だ行、ば行)と半濁音(は行)も加えてある。左の縦の行が子音字だ。子音字に母音記号が上下左右に規則的に付いている。このように、インド系文字はとても合理的にできている。

インド系文字は、左から右に向かつて書く。分かち書きをするかしないかは、言語によつて異なる。同じデーヴァナーガリー文字でも現代語であるヒンディー語では分かち書きをしない、古典語であるサンスクリットは分かち書きをしない。デーヴァナーガリー文字の特徴として、ひとつの単語は各文字の上部の横線がつながる。個々の文字の書き順は、上から下に、左から右に、が基本である。

表③は日本人の名前「鈴木」をデーヴァナーガリー文字で書いたものだ。

ヒンディー語には母音や子音が日本語よりも多いので、実際のデーヴァナーガリー文字の母音字や子音字は表②に出したものを以外にたくさんある。デーヴァナーガリー文字全体を知りたい方、個々の字の書き順や発音を確かめたい方は、ホームページを見てください。

[http://www.3arutsac.jp/~kmach/hp\\_top.htm](http://www.3arutsac.jp/~kmach/hp_top.htm)

図①

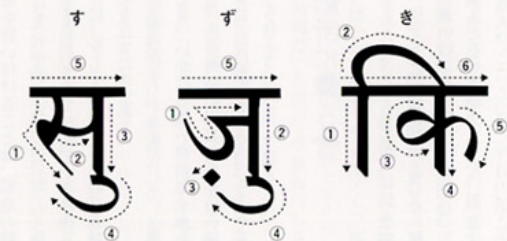
	母音 子音字	-a	-i	-u	-e	-o
デーヴァ ナーガリー文字		ा	ि	ु	े	ो
	क	का	कि	कु	के	को
ベンガル文字		া	ি	ু	ে	ো
	ক	কা	কি	কু	কে	কো

図②

母音 子音字	あ	आ	a	い	इ	i	う	उ	u	え	ए	e	お	ओ	o
क	か	का	ka	き	कि	ki	く	कु	ku	け	के	ke	こ	को	ko
ग	が	गा	ga	ぎ	गि	gi	ぐ	गु	gu	げ	गे	ge	ご	गो	go
स	さ	सा	sa	し	शि	shi	す	सु	su	せ	से	se	そ	सो	so
ज़	ざ	जा	za	じ	जि	ji	ず	जु	zu	ぜ	जे	ze	ぞ	जो	zo
त	た	ता	ta	ち	चि	chi	つ	त्सु	tsu	て	ते	te	と	तो	to
द	だ	दा	da	ぢ	जि	ji	づ	जु	zu	で	दे	de	ど	दो	do
न	な	ना	na	に	नि	ni	ぬ	नु	nu	ね	ने	ne	の	नो	no
ह	は	हा	ha	ひ	हि	hi	ふ	फु	fu	へ	हे	he	ほ	हो	ho
ब	ば	बा	ba	び	बि	bi	ぶ	बु	bu	べ	बे	be	ぼ	बो	bo
प	ぱ	पा	pa	び	पि	pi	ぶ	पु	pu	ぺ	पे	pe	ぼ	पो	po
म	ま	मा	ma	み	मि	mi	む	मु	mu	め	मे	me	も	मो	mo
य	や	या	ya				ゆ	यु	yu				よ	यो	yo
र	ら	रा	ra	り	रि	ri	る	रु	ru	れ	रे	re	ろ	रो	ro
व	わ	वा	wa												

図③ 日本人の名前の表記例

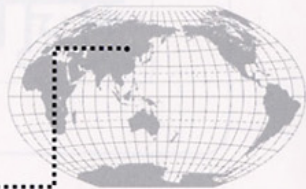
鈴木
すずき Suzuki
सुज़ुकि



# 甘くて苦い、 収集の思い出

小長谷 有紀 (ながやき)

研究戦略センター



## 特別展「大モンゴル展」の 企画開始

展示の方法は企画によって多様にありうるけれども、準備のために十分な時間があることは、



大モンゴル展の全体風景。資料を収集するほかに、映像資料も作成した



展示場のゲル内部。一日館長となった旭嵐山は「おばあちゃんの家に戻ったみたい」と感想をもらした

どんな企画にとっても悪いことではないだろう。一九九八年に実施された「大モンゴル展」の場合、およそ五年の準備期間を要した。展示の五年前に提出した企画書には、一九九五年、九六年、九七年の三年間にわたる収集計画を記載しておいた。当時、モンゴル国は民主化の波を受け

て市場経済へと急激に移行し、社会全体として混乱していたから、一度に多額の外資を持参して大量に文物を買い付けることは、現地の経済活動とわりわけ文化をめぐめる経済に対して致命的な破壊力をもたらすのではないかと危惧された。それゆえに、少しずつ確実に集めて蓄積するという戦略を立てたのである。

現地の経済環境がすっかり変化してしまっただけで、現在から見ると、いかにも遠い昔の出来事のように思われる。あの当時の収集活動を思い出して、不思議な甘さといくばくかのほろ苦さをもう一度味わってみよう。

## 映画撮影所に舞う雪

一年目はゲルとよばれる移動式住居を内装品とともに一式まるごと買い付けることに焦点を当てた。当初の段階での最大の難関は、三年後の展示であることの説明で、激変する社会に生きる人びとにとって、今日の話こそが必要とされているのに、三年先のために一年後に引き取りに来るといふ話をするわたしは、まるで宇宙人であったに違いない。

さいわい現地の歴史博物館の元館長であり、民博客員教員であったルタバズレン氏の協力を得て、内装品一式のリストを作成し、事前に発送することができた。つまり、わたしは収集さ

れたものを引き取りに行けばよいだけなのだった。

くだんの住居一式はウランバートル市の東方にある映画撮影所の一角に集められていた。一部は映画で使われていたセットであり、一部には収集に参加してくださった方がたの持参品もあった。そうしたモノの由来をできるだけ詳しく、民博特製のカードに記録してゆく。

「伝統的」であることを装わなければならない。博物館はしばしば「古き」を演出する、と往々にして批判されがちである。しかし、カードに記入していること、本当にモノたちには「古き」が宿っていることも確かに了解される。何しろ、家族の思い出が詰まっただけで、まさに現在を生きている人にとつての過去がそのまま手渡されてくるのだから。「ああ、それ、おれんちにあつたやつ、もういまさき買おうと思っても見あたらないよなあ」。まだ暑い八月の野外での作業だったのに、突然、寒波に見舞われ、雪の舞うなかでの作業となった。手がかじかんでベンがもてない。革製のジャンパーと、毛糸のフワラと手袋を借り、全身の防寒対策をして作業を続けた。思えば、突然に気象が変わるのはモンゴルの常だから、調査に出るたびに毎回、服を現地借用してきたような気がする。

## 許可書の入手

ようやく整理が終わわり、いよいよ国外搬出の手続きとなる。当時は古いゲル一式をもち出すにも木工業界の許可が必要であった。もちろん古い品物なので、本来なら、現代の業界とはな

ら関係がないにもかかわらず、その証明書がなければ、通関の許可が下りなかった。なんとも理不尽に思われたが、理詰めで当たっても解決しそうにない。

そんなとき、尽力してくださったのは、モンゴルの偉大な国民作家S・エレンベグ氏である。彼は、普段身につけない熱帯を胸にこれみよがしにつけて木工業界のオフィス系に現れた。彼屋の扉はなかなか開かない。ようやく開くと、部屋はまず普及の内ポケットから白い封筒を取り出し、「これが私の名刺だ」と言って事務員らしき人に手渡した。それから彼だけが引き入れられ、戻て来たときには書類にサインがしてあった。

おそらく、彼の名刺とはモンゴル語でいうところの「緑色のもの」であつたろう。何ドル札であつたかを説明する代わりに、彼は言った。「馬乳酒を飲んで、タルバガンを食べたいやがる」と。そう、オフイスではちやうど、行く夏を惜しんで馬乳酒を飲み、来る秋に先んじて越冬前の小太りにした草原マーマットの肉に舌鼓を打っていたのである。

一件落着いてから、お世話になった人びとのお礼を兼ねて、わたしもささやかな宴を催した。ただし、タルバガンを入手する見込みはない。わたしはただ酔い覚ましに子ども公園のなかを、タルバガンの像に向かつてからがら散歩した。「こんな動物の像を立てるなんて世界でモンゴルだけだろう?」とエレンベグ氏はこぼれながら、「ユキ、これからも困ったことがあつたら言いなさい。助けてあげよう。だけど、あと五年の間だよ」と。そして、その宣言と折り、彼は二〇〇〇年五月に他界した。こゝ冥福を祈る。

ゲルを収集した翌年(1996年)には、民族衣装を中心に収集し、その収集風景を収めた映像資料も撮影されていた



モンゴルの国民作家  
S.エレンベグ氏。展示  
期間中に招聘し、講  
演を依頼した



早秋、狩猟が解禁されると、人びとは鉄砲をかついでタルバガンを求めて野に出る



子ども公園のなかにあるタルバガン像。近年、らくがきがひどくなっている

# イモを見分ける

## タロイモづくりは男の仕事

現地調査も何度目かになったフィジーのワイレブ村。私がタロイモのことを知っていたが、聞いて、男性たちがサンプルを家まで運んでくれることになった。

フィジーでは伝統的に男性と女性の役割分担がはっきりしている。畑仕事は男性の仕事で、タロイモの耕作もやはり。女性は近場の畑へ出かけるが目的。せいぜい下草刈りくらいで、男性のようにはイモの苗を植え付けたり、逆にひっこぬいて収穫したり、というような仕事はしない。加えて公の場では夫婦でも男女一緒に歩かないという土地柄、日本から来た女性客を男性陣のなかに放りこみ何キロも離れたタロイモ畑まで歩かせるなんてとんでもない。というわけで、今回は自分の足は使わないお姫様のフィールドワークになってしまった。

それにしても、でてるわ、でてるわ、次から次へともちこまれる、ゼーんぶ違う種類だというタロイモ（私には全部同じに見えるけど……）。

家の前に順に並べて、葉全体、葉柄、そして全体図、と写真に取め、ノートに名前とそれぞれの特徴を言われるままに書きこむ。女性たちは男性ほどタロイモのことを知らないらしく、私のノートをのぞきこんでは「えっ、それもタロイモの名前なの」などと、感心することしきり。

それにしても畑も見ずにタロイモ調査なんて。そこで言ってみた。「あー、実際に生えているところを見た方がよくわかるんですけど」。ああそうか、とにこり笑った村のおじさん、タロイモ・サンプルを花束のように束ねてもらい、そのままじっと待っていてくれる。確かにさういうふうに見えるよね。でもちょっと違うんだけどなあ。長旅の末に到着したタロイモは、こうして立てるとしなびてぐったりしているのが一段とあからさま。仕方がない、おじさんに謝意を示すた



菊澤 律子 (さくさわ りつこ)  
先端人類科学研究部

## 男女で異なるタロイモの分類

現地調査では、いろいろなタロイモがどんな風に分類されているかを知ることが大切だ。分類の仕方はいくつかあり、男性と女性で多少違う。女性はオーソドックスな「真タロ」、古い「タロ」、そして「新しいタロ」の三種。農業試験場から最近導入されたものはもちろん全部、新しいタロだ。男性の方はこの分類とは別に、タロイモの形状に基づいた分類も使うという。「長いタロ」と「ヤツガシラ・タロ」。「長いタロは、親イモが大きくて長く、そのまわりにコイモがたくさんつく。ヤツガシラ・タロは、親イモの一部がほとんど分岐して太っていくんだ。形を見たら違いは明らかだよ、もちろん収穫の仕方も違うんだけどね」。

## タロイモ

(学名: *Colocasia esculenta*)

サトイモ、サトイモ科。日本の「サトイモ」と同種。太平洋の多くの地域で主要栽培植物のひとつとなっており、さまざまな変種がみられるが、近年では特に早生種などの品種改良もさかんである。原産地はインドで、マレー半島などを経て太平洋全域に広がったと考えられている。

ところが普段タロイモと馴染みのない生活を



並べれば違いがわかるかな?



水田での量産栽培もある。整備が終われば植え付けがはじまったころのタロイモ水田の風景



「長いタロ」のはずが?? 親イモ(下の細く突き出ている部分)の上に2つ、新しいイモが育っている



ヤツガシラ・タイプのタロは、太い葉柄(写真上側)とまわりに育つ新芽の間に足をいれてひっぱると、育ったタロだけが収穫でき新芽はそのままだ中に残る



村の近くの畑には女性もよく下草刈りや食材集めにでかける。タロイモの葉は現地では大切な野菜のひとつ



食膳のついでにタロイモ。主食なので、ごはん同様、味付けはしない



畑からタロイモを持ち帰ってきた村のおじさん。ここではタロイモ耕作は男性の仕事

つても、この分け方がよく理解できない。業を煮やした男性の一人がとうとう、さらなる見本をとりて走ってくれた。そして、ほらね、と手渡されたタロイモは確か、長いタロのはずだけど……。「ちょっと待って。これって違うみたい」。

そんなことあるものか、と言いながらあらためて運びこまれたサンプルを見た現地の男性たちもびびくり。いわれてみたら確かに形は「ヤツガシラ・タロ」だ。でも収穫の仕方は「長いタロ」だよ。

男性側の分類がその後一部修正されることになったのかどうか、それ以来ワイレブ村にもどっていない私には残念ながらわからない。

## 家族のために

「アテ・マサン(筆者のよみ名)、やっぱり妹がカレッジへ通う学費を稼ぐために、六月になったら海外へ出稼ぎに行こうと思います」。

アミラからメールが届いたのは、今年の四月であった。アミラはフィリピン南部ミンダナオ島のジェネラルサントス市に住むイスラーム教徒の二四歳の女性である。父親を亡くし、母親と妹の三人家族。高校卒業後、地域社会で保健活動を行う団体で働いていたが、ほとんど報酬がなく、家族に負い目を感じていた。

ジェネラルサントス市周辺沿岸部のイスラーム教徒のコミュニティでは、海外へ出稼ぎに行く女性が一九九〇年ごろから増えている。その理由は、アミラのように「家族のために」というものが多い。「商売をはじめの資金をつくるために」という人もいる。彼女たちの大多数が、同じイスラーム教徒が多く生活する中東の産油国で家事労働者として働いている。

「ジェネラルサントス市で仕事を探そうとしたら、イスラーム教徒はロリストだつていうのよ!」ジララが悔しそうな表情を浮かべた。

フィリピン南部では、少数派のイスラーム教徒中心の武装集団と政府軍とのあいだで武力衝突が続いている。とりわけ「九・一一同時多発テロ事件」以降、一般のイスラーム教徒に対しても差別と偏見が強められ、彼らが地元で就職するのは、いさう困難になった。これも彼女たちが海外へ行く理由のひとつである。

## 家事で体験する階層格差

「海外では、とにかくいろんな種類の果物を食べたので、私の肌はヘスベになりました」。

があつたのだらう。

たとえばサウジアラビアでは、外国人家事労働者には労働法は適用されず、定期的な休日や自由な外出は認められない場合が多い。それに対して、アラブ首長国連邦やクウェートでは、比較的行動の自由が許されるようだ。そのため、ここでは「オープン・シテイ」であると表現され、渡航先として人気が高い。家族や友人から離れる孤独感や、雇用者の一存によって形成され

幼い子ども二人をおいて、サウジアラビアで家事労働を体験したアミラは、苦勞の多かった経験のなかで、この話をするときだけは目を輝かせた。

一般的にフィリピンから海外へ出稼ぎに行くのは最下層ではない。しかし、アミラたちが生活する地域の少数派のイスラーム教徒には、これは当てはまらない。彼女たちの日常の食事は、たいてい山盛りのごはんとおかず一品。ジェネラルサントス市から二十キロも離れば、電気供給は不安定な小な家に生活している。おむに中東産油国へ出稼ぎに行くのは、リクルーターなどに支払う手数料が比較的安いからでもある。それゆえに、海外での近代的な家庭における「家事労働」を通じて、階層格差を痛感することになる。

「あつちでは、カーペットを使用しているから、掃除機を使って掃除をしました」。

「洗濯機がやってくれたので、そのあいだに昼食をつくることができました」。

「雇用主の家は、三階建てだったので、スリランカ人の家事労働者が二階と三階の掃除を、私が



ほとんど使われないまま放置されていた洗濯機(サランガニ州)

一階の掃除と料理を担当しました」。

狭い家のなかと周辺を竹ボウキで掃き、ポンプで水を汲んで、洗濯物を一枚一枚手洗する日常からは異なる体験である。どうやら、海外で家事労働を経験した女性のあいだでは、洗濯機が人気のものである。それで帰国後に洗濯機を購入してみても、電気と水の供給が十分でないので、結局あまり稼働しない。

## 孤独を抱きながら

また私が学生だったころ、海外での寂しい想いを共有しようとなりに語りかけたが、拒絶されました」。

「あなたはフィリピンで自由に動くことができているからいいけど、私たちには、そのような自由はありません」。

憤りをこらえようと顔を強ばらせたネナの表情が忘れられない。彼女には、「家事労働者という立場の孤独」と「気楽な留学生の孤独」を軽々しく一緒にしてほしくない、という気持ち



海外出稼ぎから帰国したイスラーム教徒の女性(ジェネラルサントス市の市場にて)

アミラからメールが届いた。「アテ・マサン、やっぱり海外に行くのをやめた」。出稼ぎの孤独やリスクを思いやると、正直、とこもホツとした。



サウジアラビアなどで働くフィリピン人を求めるエージェンシーの看板(マニラ市内マニラ通り)



海外出稼ぎで貯めた資金を元手に小規模雑貨店を開く女性(サランガニ州キアンバ州)



海外出稼ぎから帰国する家族を出迎える人びと(ニオアイキノ国際空港)

# 海を越える 家事労働者

見ごろ・  
食べごろ  
人類学

石井 正子

(いしい まさこ)

地域研究企画交流センター

親子で楽しむ夏休み企画

企画展

# 「みんぱく水族館」開幕

—みんぱくに水族館がやってきた—

水の生きものとのあいだには昔から深いつながりがあります。民博ではこの夏、世界各地の水族にちなんだ豊富な民族資料を紹介するとともに、約30種380匹の生きた魚や貝を展示。日本「漁撈」、オセアニア「航海と交易」、南北アメリカ「アートと表現」、アジア「役に立つ魚」、アフリカ「イメージネーション」という、5つの地域それぞれのテーマにそった標本資料は、生活道具、造形、漁具など、約100点で、夏休みの宿題や自由研究のヒントも盛りだくさん。地域ごとにずらりと並んだ水槽のなかで魚たちがきらきら泳ぐ姿を眺めながら、ご家族でお楽しみください。

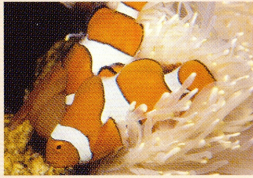
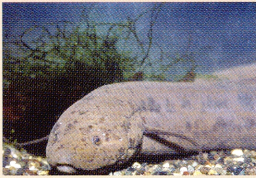


魚形棺桶(ガーナ)



えびすの置物(日本)

会 期 7月21日(木)～9月20日(火)  
 場 所 国立民族学博物館 常設展示場入口部分  
 主 催 国立民族学博物館  
 生物監修 大阪・海遊館  
 協 力 (株)海の中道海洋生態科学館  
 後 援 大阪府教育委員会、吹田市教育委員会  
 協 賛 寿工芸株式会社



サケ皮の衣服(ロシア)

月刊



次号予告

9月号 暮らしの  
特集 サリー

2005年8月号

第29巻第8号通巻第335号 2005年8月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 大森康宏

編集委員 池谷和信 樫永真佐夫 福岡正太  
八杉佳穂(編集長) 山中由里子

編集協力 財団法人千里文化財団

制作 言葉工房

デザイン 塩見勝則

撮影 桑島秀樹

製版 株式会社吉田プロセス

印刷 株式会社サンコウ美術印刷

資料提供・協力 樹屋友子、Danongan S. Kalanduyan、  
NHK出版、(財)東京大学出版会

■ 本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係へ  
■ 本誌掲載記事の無断転載を禁じます

## 編集後記

民博には、世界各地のモノが所蔵されているが、そのモノに憑いてきた「物の怪」も収蔵棚の間をさまよっているらしい。収蔵庫で働くスタッフは先輩たちに、民博の世にも奇妙な物語を必ずや聞かされ、自ら体験してしまったりもするという。私自身、初めて収蔵庫に入った時に、「死霊」と標本札が付けられた、どす黒いミイラのようなものにでくわし、腰を抜かしそうになったことがある。びびっていると、自らが主と化したベテランに「夏には肝試しもしたりするんですよ」と軽くあしらわれてしまった。

標本についての害虫は燻蒸すれば退治でき、カビや汚れは丁寧に手入れして落とせるが、万国共通の悪霊払いなんていうものがあるのだろうか。呪いの効力に国境や文化的な境界線があるのだろうか。伝染病には予防注射を打って現地調査にいけばよいが、アボリジナルの影の魂メルレに果たして厄神さんのお札が効くのだろうか。特集を組みながら、こんなことで悩んでしまった。

しかし、学校も試験も、会社も仕事もない、しかももいた土地のしがらみから解放された物の怪たちは、民博の収蔵庫で案外楽しくゲゲゲのゲーと国際交流しているのかもしれない。何語で対話しているのだろうか、とこれまた悩んでしまう。

とりあえず、くわばら、くわばら。

(山中由里子)